

特別活元指導の会 教材

思想を通じて身につける活元運動 Ⅳ

「瞑想法」としての野口整体

二〇一三年十二月十四日 会場・熱海 小嵐亭（松の間）

不許複製

野口整体 身体文化教育

気・自然健康保持会

主宰 金井省蒼

一部 講義 開始 十一時 会場 松

司会 伏島隆興

《日程》

受付 九時三十分開始

十時三十分までに会場到着のこと

一部終了 十四時三十分予定

― 入浴（十四時三十分～十五時三十分）

開会挨拶 受付終了次第

金井とも子

二部 活元運動 開始 十五時三十分

講師

金井とも子

塾生紹介

二部終了 十七時三十分

食事

十八時三十分～二十時三十分 会場 松

挨拶と乾杯 中島かおる(幹事)

懇親会

二十時三十分～

会場 竹

思想を通じて身につける活元運動 IV

「瞑想法」としての野口整体

目次

はじめに

一 全生思想と私の歩み

二 近代科学と東洋宗教

I 近代科学と東洋宗教の対比とは

II 現代の日本人と科学

III 西洋の伝統(キリスト教)が生んだ科学、

東洋宗教が生んだ野口整体

三 瞑想法としての野口整体

四 整体(個人指導)と自我の再構成

I 私の自然流「臨床心理」

II 「旋毛つむじから臍へそに」

— 自我から自己への中心の移動

伏島隆興

〈資料〉

現在(理性・論理的)意識を発達させた近代科学
潜在(感性・直観的)意識を豊かにした東洋宗教

禅の本質の中に生きていた日本人

※文中の「——◇——◇——◇——◇——◇——◇——」は、

中略部分です。

一部 講義

思想を通じて身につける活元運動 Ⅳ

「瞑想法」としての野口整体

二〇一三年十二月十四日 会場 小嵐亭（松の間）

はじめに

- 1 活元運動を「思想を通じて理解する」とは
- 2 昨年の

「思想を通じて身につける活元運動Ⅲ（小嵐亭）」
を振り返って

- 1 活元運動を「思想を通じて理解する」とは

活元運動は「自分の健康は自分で保つ」ためのものです。

『野口整体と科学 活元運動』第一部 第三章 三
「自分の健康は自分で保つ」という理念は、野口整体の「全生」思想の基本です。ここには、「健康は医療が管理する」西洋医学と野口整体の、「生命観」の上での大きな差異があります。

この活元運動を、当会が主題とする「思想を通じて身につける」ことが、この講義の目的です。

『野口整体と科学 活元運動』第一部 第三章 一
「活元運動」の起源は、師野口晴哉が古神道に伝わる「靈動法」を体験したことに始まっています。靈動法では、ある種の霊がその人を動かし健康に至らしめるという解釈もあり、迷信的な捉え方になりがちでした（狐憑こくつきき、神懸かみかりなどと呼ばれることもありました）。

師は自らの実践を通じてその本質を見抜き、西洋医学の生理学的な解釈（錐体外路系運動）を付与し、積極的に健康保持に役立てるようにしました。のみならず、「整体」に深層心理学を取り入れた師は、無意識を啓くための「身

体の開墾としての行」として位置づけたのです。

当会では二〇〇五年四月よりの会報を通じて、活元運動における思想、それは、「**整体**」という身体との「**心理的・精神的な関係**」を表現してきました。既に、ここに、活元運動を「**思想を通じて理解する**」という活動が始まりました。

思想は知的理解によるものですが、野口整体の世界においては、何より「**身体感覚**」を高めることが肝要で、これが修養です。修養のために必要な知的理解が教養です。

ぼかんとして活元運動に良く入って行くと、トランス状態になるのですが、これは**変性意識状態**とも呼ばれ、この意識に至ることが**瞑想法**（註）です。

『野口整体と科学 活元運動』第一部第二章二・三

（註）**瞑想法** 一般的な瞑想法の説明は、姿勢を正して坐り、

腰骨を立て上体の力を抜いて、呼吸に意識を集中する。

外界に向いていた意識を、内界・身体感覚や呼吸に向け

て、**只管に坐る**（只管打坐）。活元運動の場合も同様に、

考える理性的な意識のレベルが下がり、**変性意識状態**に

導かれる。

しかし**変性意識状態**は、その人の人柄や「**教養・文化**」

の差異により、大きく異なって来るのです。そこで、活元運動に「**教養と修養**」が必要だというわけです。これを高め、また深めるための**思想教育**が当会のあり方（信条）です。

思想とは、哲学の世界で「**考えること**」によって得られた、体系的にまとまっている**意識の内容**を言い、「その人の生き方、社会的行動などに一貫して流れている、基本的な物の見方、考え方」なのです。

哲学者の森有正氏（一九一〜一九七六年）は、師野口晴哉を「日本に初めて真の思想家が現れた」と評されています。

こうしたことを踏まえ、当会では二〇二二年の「I〜III」の講義を始めとして、活元運動を「**思想を通じて理解する**」教育に尽力しています。

そして、今回「IV」からは本格的なものとなりました。



一 全生思想と私の歩み

1 私が選んだ「生き方としての野口整体」

— 野口整体を「革命的な思想」だと捉えた

2 無意識の世界（身体）を知らない現代人

3 全生思想

4 「自身の生命力を抛り所とする」

野口整体の生き方は東洋宗教

1 私が選んだ「生き方としての野口整体」

— 野口整体を「革命的な思想」だと捉えた

『野口整体とユング心理学 心療整体』

師野口晴哉が亡くなって、今年（二〇一三年）で三十七年になります。この間に、野口整体は多くの人々による様々な解釈を経て、健康や教育などの分野で活用されてきました。その中で、私は一直弟子として整体指導を継続してきましたが、「潜在意識」を重視し、「整体を保つ生き方」を指導することに専念してきました。それは私が、青春時代に感じた「どう生きればいいのか」という問いを、今も追

続けているようなものでもあります。



私は野口整体を学び初めの頃、「自発的である」ことが、生命が輝く原理であり、「非自発的な生活をしている」と病気になる」ということが分かってきました。自分の十代が暗かったのは、非自発的な生活に原因があったことを悟ったのです。

そして「病、心、身体」というものについての師の教えに触れ、「病気は心の訴えである」という原理を知るようになったとき、「これは革命だ！」と思うようになったのです。

科学万能の時代に常識であった物質的な西洋医学に対して、師野口晴哉の「整体」は革命的な思想・行法だと捉えたのです（このことが、後に「天風哲学」と「ユング心理学」という思想につながる）。

2 無意識の世界（身体）を知らない現代人

『野口整体とユング心理学 心療整体』

静岡県熱海市で整体指導を始めたのは一九七二年のことです。やがて一九九一年、来宮神社からずっと上がった高台に道場を構えました。一九九八年には、満五十歳を機に、師野口晴哉に倣い「気・自然健康保持会」を設立する意欲を持つに至ったのです。

他の整体には身体の不調を訴えてくる人が多いと思うのですが、当会では心の悩みを抱えている人が多いのです。その中で積極的な人は「いかに生きるか（どのように生きればよいのか）」という道を求めてくる人が増えていきます。

このような人が増えてきた大きな原因の一つに、現代では多くの人が自分の頭の中だけで、直面する問題を判断しようとしているということがあります。その結果、どうしてよいのか分からなくなっているのです。意識の中だけでぐるぐるしていて、無意識の世界（身体）を識らないために大変狭くなっているのです。

具体的に言うとうと、問題に直面した時、心が動揺したまま、問題を解決する方へ手段をめぐらすことを考えてしまうのです。言い換えると、心（潜在意識）のありようを振り返り、身体（姿勢）を調えることをせず、頭（現在意識）で対処

しようとのみするのです（昔から「調身・調息・調心」という言葉がありました）。

つまり「心の力」、また「肚」というもの（＝無意識）の働きに、現代の日本人は無関心なのです。これは敗戦後の日本社会の変化であり、遠くは明治以来の近代化によるもので、背景に「科学」があるのです。

「生き方」とは、体と心の使い方なのです。体と心をどのように用いて生きるかという問題です。

3 全生思想

『野口整体と科学 活元運動』扉

野口整体で云う「整体」とは、全力を発揮して生きるための「身心」のあり方です。

この「心」を説くのが「全生」思想です。

師野口晴哉は、十五歳で道場を開き治療家として出発しましたが、その当初からの「全生」思想を通じて、人間が全生するため、「心と体」を育てつつ導くという「野口整体の体系」を創始しました。

全生とは、自然健康を保持して生命を全うすることで、野口整体の基盤となる全生思想は、師野口晴哉の死生観から生まれたものです。

師は、次の「死」、「全生訓」と題した文章で、死と生という対立概念を統合する「死生観」を表し、全生思想の端緒を開いています。その中で、「感覚」することの大切さを示唆しています。

感覚、そして死も生も、科学では扱われていないのです。

死

『風声明語Ⅰ』（二五四頁全生社一九九五年）

人間は誰も死にます。死ななかつた人は一人もおりません。それ故、生きている人間の中にはいつも死があります。十年生きたことは、十年死んだのであります。それ故、体を調べることが発達すれば、どの人にも死が行なわれていることが判ります。二十七歳前後までは、生に向かってその体の営みは行なわれておりますが、あとは死ぬ為に生きているのです。人間は安らかに、静かに死ぬ為に生きているのです。

しかし安らかとか、静かとかいうのも人間のつくったもので、生きれば死ぬのです。澁刺と生きた者は、自ずから静かに眠るのです。生の發揮を説くのもこの為で、人間の生きること、生き切ること、その生の本来の要求といつてよいでしょう。

全力をもって生きている者には悔いはありません。悔いはズボラな人のものです。悩むのも、苦しむのも、楽しむのも、喜ぶのも、その全力で為して来た者には、悔いの余地はありません。もう一度生まれ直したとて同じことを同じに行なうだけです。人間の生きている間は短いのですから、まず全力を挙げて生きることを心がける可きです。これを全生といえます。

全力を挙げて行動し、感覚し、死ぬことです。

『偶感集』（二二四頁全生社一九八六年）

澁刺と生くる者にのみ深い眠りがある。
生ききった者にだけ安らかな死がある。

『野口整体と科学 活元運動』はじめに 1

4 「自身の生命力を抛り所とする」

野口整体の生き方は東洋宗教

「野口晴哉生誕百年」に当たる二〇二一年の三月十一日、三陸沖を震源とする、東北地方太平洋沖地震が起きました。

…当時、東北地方の避難所生活を送る人々の様子をテレビで見ると、私の立場から目にしたのは、何らかの医薬を常用する人が、薬が手に入らないことで不安な日々を過ごしている、という様子でした。このような大きな災害は、おそらく太平洋戦争中と直後の混乱に次ぐものでしょうが、あの時代、これほどに医薬に頼る人はいなかったと思うのです。是非に必要な方に対して、医薬への依存を否定するものではありませんが、医療が「投薬医療」と揶揄される時代を通じて、医薬への依存性がいたずらに高くなつたことも事実です。

このような大震災に見舞われた日本人として、改めて、

野口整体の基本理念である「自身の生命力を抛り所とする」生き方を考えてみたいと思います。

私は、師野口晴哉に出会ったお陰で、この道四十五年、医薬に頼らず生活することができています。このような人生となるには、医薬への依存性が高まってからでは困難ですから、若いうちから自身で「潜在生命力を喚起する」ことを鍛錬し、「自然治癒力への信頼」を培うことが肝要です。

野口整体の理念は、自然治癒力への信頼を抛り所として「自分の健康は自分で保つ」ことです。そして、この「自分の健康は自分で保つ」にとどまらず、「身体（身心）を開墾することによって人間の可能性を見出そうとする野口整体」を通じて、ここにここ数年、私の人生は深いものとなりました。

二 近代科学と東洋宗教

I 近代科学と東洋宗教の対比とは

1 身体を開墾する野口整体の源は東洋宗教

— 『病むことは力』終章からの取り組み

2 近代科学と東洋宗教

— 東西の文明・文化を相対的に理解する

3 病症観には文化的背景がある

— 東西の自然観の差異「病症をどう観るか」

4 西洋には自然治癒力という概念はない

— 石川光男氏の思想との出会い

『野口整体と科学 活元運動』はじめに2

1 身体を開墾する野口整体の源は東洋宗教

— 『病むことは力』終章からの取り組み

二〇〇四年六月、『病むことは力』（二〇〇四年春秋社）

を初出版することができました。取り掛かって一年九ヶ月後のことでしたが、師野口晴哉二十八周忌に合わせての発

行となりました。

二作目の執筆が始まったのは、二〇〇六年のゴールデンウィーク明けのことでした。そして現在に至るまでの間、とりわけ二〇〇八年四月より「科学とは何か（科学哲学）」に取り組んだことで、「身体観」と「生命観」（註）の上で、私は次のような主題を捉えることができました。

それは「近代科学と東洋宗教」という主題です。

（註）「近代科学と東洋宗教」の主題を通じて、『野口整体と科

学 活元運動』、『野口整体とユング心理学 心療整体』、

『野口整体 科学的生命観と「風邪の効用』として刊行

予定。これらを、科学の知・禅の智シリーズと呼ぶ。

これらの書の動機は、『病むことは力』「終章 日本の身体文化を取り戻す」に始まっています。ここでは、「野口整体の源流は日本の身体文化」と少しばかり表現しましたが、本書ではこの内容について視野を広げ、「日本の身体文化」の源泉である「東洋宗教」とは何かを、「近代科学」を相対化することを通じて著すことになりました。

相対化とは「一面的なものの方を、それが唯一絶対ではないという風に見なす、また提示すること」です。

私がこの道に入った一九六七年という時は、敗戦後から続く科学万能主義という時代で、野口整体を良く理解する人は少なかつたのです。



2 近代科学と東洋宗教

— 東西の文明・文化を相対的に理解する

『野口整体とユング心理学 心療整体』

幕末・明治以来、日本人は、西洋文明・近代科学の影響を大きく受けてきました。

幕末前まで、日本文明はどのようであつたかということ、古来よりの神道と、中国・朝鮮からの影響による、儒・仏・道教を基盤とする東洋宗教文化というものでした。

江戸時代、幕末前まで二五〇年の間、長崎・出島を窓口として、わずかに西洋文明の影響を受けていたものの、幕末からの西洋文明の影響はすこぶるものがありました。

こういう中でも、伝統的な東洋宗教文化はそれなりに保たれてきたのですが、敗戦（一九四五年）後は、著しくこ

れを喪失しました。

ゆえに現代の日本人は、近代科学的な価値観に強く支配されれているのですが、このことは意識されず、東洋宗教文化が何を教えていたのか知らない人が大多数となっています。

かつて、日本社会の秩序を成り立たせていたのは、徳（仁・義・礼・智・信の五徳）による王道を説く儒教（古代中国の孔子の教え）でした。しかし今日、若者の多くは行儀・礼儀作法を身につけておらず「敬語」も使えません。これが戦後教育の実態です。

このような時代、東洋宗教を基盤とする「修養法・瞑想法としての野口整体」を理解し体得する上で、東西の文明・文化の背景を改めて知らしめることが肝要である、と考えるようになりました。

そこで、私は「近代科学と東洋宗教」を主題として掲げ、近代科学とはどのようなものであり、東洋宗教とは何であったのかの考究（五氏「井深大・湯浅泰雄・石川光男・河合隼雄・立川昭二」等の思想を学び、研究すること）を通じて、野口整体を伝えることとしました。

そして、西洋医療のあり方に疑問を感じ、——それは、近代科学的社会の問題点を漠と感じたまま——これに代わる

ものとして野口整体を求めている人に、東洋宗教を基盤とする野口整体を、先ず、思想として理解（基本的な物の見方、考え方を理解）していただくことが第一であると考えたのです。

3 病症観には文化的背景がある

『野口整体と科学 活元運動』第一部第一章 1

— 東西の自然観の差異 「病症をどう観るか」

世界各地には、様々な伝統的療法や健康法があります。

これらは、各地域で育まれた自然観や生命観の上に成り立っており、「生命・病症」に対する考え方・理論の相異は、各地域の文化に拠っているのです。

そこから生ずる「病症の解釈の差異」によって、異なった姿（病症の捉え方）がそこに出現することになるわけです。

病症に対する捉え方、また向き合い方が異なるということとは、同じ症状であっても、別の実体をそこに観ているということなのです。

例えば先日、Tさんが個人指導で「数日前に、肩の痛み

が起き、病院に行き検査をしました」と訴えました。レントゲンでは、頸椎六・七番の間が狭くなっているとのことですが、「痛み止め」を処方されたそうです。

西洋医学的には、痛んでいる肩を「部分の故障」と見、痛みに対する対症療法（註）を行ったわけです。本人の都合（仕事をする上での支障）もあります、痛みを悪いものとして排除しようというわけです。

（註）対症療法 病気の原因に対してではなく、その時の症状を軽減するために行われる治療法。 ↑↓原因療法

こういう時、私は肩のみならず、体の全体を観察した上で、どうしてこのような「偏り疲労」が起きたのかと考えたのです（野口整体では身体の歪みを「偏り疲労」と言います）。

偏りは、必ずというほどに何らかの「情動」に因っており、「感情の動き」が身体上に偏り（歪み）を起こす（≡情動・心理が生理に影響する）のです。この時も、本人との対話を通じて、この事情が確認できました。

Tさんの場合、仕事上で不快感を味わって、数時間後の痛みの発症でした。

体の鈍い人は情動が起きて、凝りや張り、また痛みと

して感じないものですが、Tさんは体が敏感ゆえに、素早く異常が出たのです。この場合、痛みは「偏り・歪み」が元に戻ろうとする働き「自然治癒力」と観ることができません。こうして私は、Tさんの「肩の痛み」を、「体の偏りが回復に向かう働き」として観ることができ、痛みが起きた事情を確認できたことで、彼の生活全体（職業的立場と本人の感受性）をより理解できました。

ここには、病症を「故障」と見るか、「生命の働き（自然治癒力）」と観るかという大きな視点の違いがあります。

部分を見る西洋医学、全体を観る野口整体 心身分離の西洋医学、心身一如の野口整体

これまで西洋医学しか知らない、また科学的思考・科学的世界観によって教育された人にとっては、先ず、ものの見方・考え方により「身体」が違った姿に見えてくる、ということに気付くことが、野口整体を理解するための第一歩である、と説くのが金井流思想展開です。

これは、同じ風景を見て絵を描いても、人によって違う絵になるということに似ているのです。風景をどのような

感覚（感性）で捉えているかという、感覚の差異ということです。

師野口晴哉は、「いのちの真相」（野口晴哉著作全集第一巻 昭和八年 七三頁）という文章の中で「…この世の中は、相対の世界と申しまして、自分の感覚によって、その感覚を眺めている世界なのです。」と述べています。

西と東の世界観（ここで言う「近代科学と東洋宗教」）の差異が基となり、野口整体と西洋医学の病症観の差異となったのです。

4 西洋には自然治癒力という概念はない ——『野口整体と科学 活元運動』第一部第一章 12——

——石川光男氏の思想との出会い

そして石川氏の著作内容から、西洋では、人間は自然の一部という考え方はなく、自然は自分の外側にあるもので、人間の支配の対象であり、そこには、砂漠という厳しい自然環境から生み出された一神教（ユダヤ教・キリスト教・

イスラム教）に見られる自然観が基にあることを挙げています。

その上で、岡部氏は「西洋的自然観に自然治癒力がない」ことを、「東洋的自然観と自然治癒力の関係」を対比させて述べていました。



Ⅱ 現代の日本人と科学

1 近代科学を基盤とする西洋医学の見方

— 機械論的生命観と心身二元論

- ① 機械論的生命観（近代的身體観）
 - ② 心身二元論（心身分離）
- 2 現代人は科学の影響を強く受けている

『野口整体と科学 活元運動』第一部第一章 二2

1 近代科学を基盤とする西洋医学の見方

— 機械論的生命観と心身二元論

私がこの道に入った一九六七年という時は、科学万能主義の風が強く吹き、西洋医学全盛の時代でした（一九六四年十月十日開催の東京オリンピックに合わせ、十月一日「新幹線」開業。一九六一年、ソビエトのガガーリン初の「有人宇宙飛行」成功）。

この頃、師は講義で「ここ（整体協会）は気違い部落です」と、自ら語っていました。それは、野口整体の「病症を経過する」という思想が西洋医療のあり方と大きく異なっていたからです。

これは、明治以来の「近代医学一元化（明治七年医制発布）」の影響と、敗戦後からの科学教とも言うべき時代において、例えば「発熱が自然良能である」ことを、多くの人々が理解するものではなかったのです。

① 機械論的生命観（近代的身體観）



十七世紀の哲学者デカルトは、「心身二元論」と「機械論的世界観」により近代合理主義哲学を確立し、これが科

学のものの方の見方の基盤となりました。

『野口整体と科学 活元運動』第一部第一章二

彼の機械論的世界観とは次のようなものです。

「世界は時計仕掛けのようであり、部品を一つ一つ個別に研究した上で、最後に全体を大きな構図で見れば、機械が理解できるように、世界も理解できるだろう。」

彼は、動物も一種の自動機械として説明できるだろうと考えていたのです。

② 心身二元論（心身分離）

人間を心と体に分け（心身二元論による、心と体の分離）、体をさらに部分に分け（構成要素に還元して）、それらを独立した観察対象とすることは、西洋医学が科学的方法を踏まえていることを端的に表しています。これは十九世紀細菌学の発達により自然科学（＝物質的因果関係を探究するもの）として確立した近代医学の正統的な考え方です。

要素還元主義の「部分の総和が全体である」という考え方は、本来の人間は「心と体は一つ」であることが分かり難くなる傾向をもたらしました。

2 現代人は科学の影響を強く受けている

『野口整体と科学 活元運動』第一部第二章二五

科学的であることは、当たり前のこととなってしまっている（＝「科学的なものの方」だと思っていない）のです。そこで科学というものについて改めて考え、その利点と限界・問題点について把握しておく必要があるのです。

黒崎宏氏（哲学者一九二八年生）は、科学哲学（科学を対象とする哲学的な考察）の意味を『日本大百科全書』（小学館一九九四年）で、次のように指摘しています。

科学は、科学的方法といわれる一定の方法に基づいた探

究の結果であって、それによって切り捨てられた部分も多いことを、肝に銘じておくべきである。



右の「科学的方法といわれる一定の方法」について、禅学者の鈴木大拙氏（一八七〇〜一九六六年）は、「科学の網の目」と、『禅と精神分析』（東京創元社 一九六〇年）で次のように表現しています。

禅仏教に関する講演（三〇頁）

科学者は一定の法則を設定して、この法則の網の目にかからぬものは科学的研究の領域以外のものでしてこれに手をふれようとはせぬ。この科学の網の目がどれほど精密に出来ていると言ってもこれが網の目である限り、その目から脱け出すもののあることは必然であり、この目にかからぬものはなんとしても科学の秤では測れぬのである。

氏はこのように、網の目からこぼれ落ちるもの（＝「そ

れによって切り捨てられた部分）があることを指摘しています。

Ⅲ 西洋の伝統（キリスト教）が生んだ科学、

東洋宗教が生んだ野口整体

- 1 科学哲学を学び、
野口整体の社会的立脚点を定める
- 2 心身二元的西洋人
― 「我と物との対立」
- 3 西洋文明の基にある二元論的精神
- 4 東洋の自然観と「心身一如」
- 5 西洋の宗教と東洋の宗教
― 大震災で、なぜ日本人は冷静だったか
- 6 対立と支配を超える東洋宗教

1 科学哲学を学び、

野口整体の社会的立脚点を定める

『野口整体と科学 活元運動』はじめに3

ここ数年、私は戦前生まれの五氏（井深大・湯浅泰雄・石川光男・河合隼雄・立川昭二）等の思想を通じて、科学哲学と東洋の生命観を学びました。

これらの思想を通じて、私は野口整体とアカデミズムの世界とのつながりを見出し、近代科学の「心身二元論（心身分離）」と東洋宗教の「身心一元論（心身一如）」という、本書（『野口整体と科学 上・下』）の核心となる思想を掴むことができました。

こうして科学の哲学性を研究したことは、禅や老荘思想を基盤とする野口整体の世界を科学に相対化して見極めることになり、野口整体の本質を改めて捉えることができました。

科学の知（「近代科学」文明）と禅の智（「東洋宗教」文化）とは、「理性」と「身体性」（頭脳知と身体智）という差異なのです。

そして、歴史的観点から現代での野口整体の存在意義を捉え、社会的立脚点を定めることができましたのです。

『野口整体と科学 活元運動』はじめに2

野口整体が創立された昭和（一九二六年）初期という時代背景には、明治以来の、政府による西洋近代医学の急激な普及がありました。この時代は、洋の東西において近代の代替知（科学に代わる知）が模索された時代でもありませんでした。この時代背景を溯って考えますと、その前には明治維新（一八六八年）、そして、さらに大きく広げて歴史を俯瞰すると、維新の原因は西洋近代の科学文明、ルネッサンス、そして古代ギリシア文明にまで遡ることができます。

本書は、二十一世紀の現代社会における「野口整体の立ち立処を明確にする」ため、その源にある東洋宗教文化と、明治以来の西洋・近代科学文明を、思想的に（哲学的・歴史的観点から）考察することで著そうとしたものです。

2 心身二元的西洋人

——「我と物との対立」

『野口整体と科学 活元運動』第一部第三章 1-2

師野口晴哉は、一九六〇年代（後半と思われる）、植芝盛平翁の高弟で合気道の達人でもあった津田逸夫氏（註）とい

う弟子に、ヨーロッパに活元運動を広めるよう託しました。

(註) 津田逸夫(一九一四年〜一九八四年) 日本の合気道家、哲

学者。フランス留学後、一九四〇年に日本に帰国し、その後合気道の植芝盛平と整体協会創設者である野口晴哉に師事。

かつて、鈴木大拙氏がアメリカで禅を説いたように、西歐人に対して、師が、野口整体の思想と活元運動を広めることを考えられたのは、「心身二元の問題に対してのことであった」と、科学哲学の勉強を通じて、ある時、直観的に理解するに至りました。

ここでは、津田逸夫氏の文章を基軸として、西洋人の二元的精神に対する活元運動の意義について述べていきます。

津田逸夫氏は、『月刊全生』(一九七九年二月号)掲載の紀行文「ヨーロッパ事情」の中で、「ヨーロッパ人の根本には我と物との対立がある」ことについて、次のように述べています。

ヨーロッパ事情(一五頁)

日本人にとってヨーロッパとは何かといえば、それは現代文明の源泉地であるということ、明治維新から百年間、日本がたどって来た驚くべき変遷はヨーロッパの影響なくしては考えられないということ、こういう点から、地球上で特殊な重要性をもった地域と思われています。この重要性は主として文化的なもの、思想的なものであって、ここにヨーロッパの特殊性があるといえましょう。

日本で我々がその恩恵を被っている種々の文明の制度及び利器は、もちろん日本人の独創性と勤労精神によるものですが、その源へさかのぼって行けば、理論(近代科学)があり、更にさかのぼれば、ある原則(心身二元論・機械論的世界観)に行きあたり、更につきつめれば、或る種のものの考え方にまで到達します。

このものの考え方は、一口にいえば、我と物との対立(人間と外界の自然との対立)にあるといえましょう。ルネサンス以後、古代ギリシャの再発見により、人間は次第に自分の意志というものを確立するようになりました。すべては神の意志であるという宗教の絶対的権威から、科学は次第

に離脱して、独自の道を歩くようになりました。こうして、人間は自然を支配するものであるという考えが強く打ち出されたようです。

(カッコ内は筆者による解説)

この津田逸夫氏の文章では、科学を生みだした西洋人の世界観とはいかなるものかについて述べられています。



4 東洋の自然観と「心身一如」

『野口整体と科学 活元運動』第一部第三章 一五



津田逸夫氏は2で紹介した紀行文「ヨーロッパ事情」で次のように続けています。

…こういうような思想的背景のある所で、気とか、整体と

かの観念を理解させることは容易ではありません。日本は、いかに西洋化したとはいえ、いまだ自然と融和するという考えが根強く残っており、古来の種々の伝統によって継承されています。偷気というものも、自他融合が基礎にあつて、始めて成立つものといえますが、対立を基盤にしたヨーロッパの精神的風土(自他分離による個人主義)でこれを受けいれさせることは、容易なことではありません。ただちに曲解されることは当然です。



師野口晴哉が、ヨーロッパに野口整体の思想と活元運動を広めようとしたのは、自然治癒力という概念がない西洋人に、活元運動を行うことで、「自ら健康に生きる力がある人には具わっている」ことを自覚させる思想啓蒙活動というものでした。



6 対立と支配を超える東洋宗教

『野口整体と科学 活元運動』第一部第三章 1-5

：2、4の津田氏の文章は高度経済成長時代（一九五四年～一九七三年）の後、一九七九年に書かれました。その後三十年余を経、さらに伝統文化を喪失した現代の日本では、欧米化が進み、西洋文明の影響は一段と濃いものとなっています。

近代科学の元には「対立」があるのです。そして、この科学を生み出した西洋文明の根本に存在し続けてきた「対立」が、今や私たち日本人の生活にも深く根を下ろしているのです。

私がとりわけ訴えるべきそれは、西洋近代医学による「健康×病氣」という「対立」です。

野口整体の世界を知る上では、先ず、「健康とは何か」について改めて考えることから始まります。

師野口晴哉が説いた「健康とは」について、先ず「西洋医学的な観点とは異なるものである」と認識することが必要です。これは、野口整体の世界を理解する上で肝要なことです。

野口整体の生命観は「心身相関」であり、病症と健康は「非対立」という、西洋医学（科学の「心身分離」）との二つの大きな相違点があります。

また、敗戦後の科学的教育は、理性至上主義教育であり、理性に偏って発達した現代の日本人には、「うつ病症状」を抱える人が多くなりました。先進諸国に共通して見られるこの傾向は、「近代自我」の二元状態（理性と感情の対立）による影響です。

『野口整体と科学 活元運動』第一部第三章 3-2

西洋文明・近代科学の元には、「対立」があり「支配」があるのです。今回、近代科学の哲学性を勉強できたことは、『病むことは力』の終章を「日本の身体文化を取り戻す」としたことに、理論的な裏付けを得ることになりました。

東洋宗教文化（瞑想法）が何ら体得されなままでは、野口整体を身につけることはできないのです。野口整体は「人間の自然」を理解し、これと共存、さらには自然を活かす、という、東洋宗教の伝統を受け継ぐ思想と身体行なのです。